

米国福音派の教会における女性教職論

國重 潔志

序論

キリスト教会が女性に按手を行い教職⁽¹⁾とし始めて約一五〇年ほど経過したが、女性教職の是非についての教会の公同的理解は得られていない。教団・教派によって肯定的であつたり否定的であつたり、積極的であつたり消極的であつたりと理解の幅が見られる。福音派と呼ばれる教会においても、こうした理解の幅は同様に存在し、福音派としての統一した見解というものは無いように見える。

現在のこうした女性教職の理解の幅について、本論文はその神学的文脈を直面した時代状況なども含めながら歴史神学的に考察を試みるものである。そして以下の二つの理由から、特に米国の福音派に焦点をあてたい。後に詳述するが、教会歴史上初の女性教職は米国福音派の教会から現れ、教団の総意として女性に按手を施し始めたのも福音派

の教会である。したがって、米国の福音派の女性教職論を考えることは、キリスト教会が女性教職に踏み切るに至る前後を理解する助けとなると考えられる。また、日本の福音派の教会とその神学は、米国の福音派の影響を大きく受けてきており、米国福音派の神学の女性教職論を考察することによって、日本の福音主義神学における女性教職問題を検証することに資する面があるとも考えられる。

米国の福音派における女性教職問題を論じるに当たり、おおまかに二つの期にわけて考えたい。十九世紀のアメリカにおいては、福音派の教会が率先して女性に按手していたが、二十世紀において福音派の教会は女性教職に消極的な面も表れるようになってしまった。そうしたことから、本論では十九世紀米国における按手開始前後と、その後の二十世紀における展開とに分け、それぞれの歴史的経緯と背後についた神学的確信をとらえてみたい。

さて、「JES」、「福音主義」、あるいは「福音派」という言葉について確認しておく。宗教改革以来よく用いられた福音主義という言葉であるが、ジョージ・マルスデンとドナルド・ディートンの間の論争に代表されるように、福音主義、あるいは福音派の意味するものに関して議論が続いている。福音派の歴史的・神学的実体に関するのコンセンサスはとれていない⁽²⁾。ここでその論議に深く入ることはできないが、現行の福音派の教会の多くが十九世紀米国リバイバリズムとその後のファンダメンタリズム、またネオ・エヴァンジエリカリズム⁽³⁾と何らかの関係を持ち、また女性教職はこのリバイバリズムのなかで生じてきたことを鑑み、「JES」では、「リバイバリズムの流れに影響を受けて聖書の権威を尊重した教会とその流れ全般」を福音派と呼称し、「JES」の福音派の教会が女性教職に関して歴史的にどういう神学的立場をとったのか考察していきたい。

按手開始前後

A 歴史的発展

1 宗教改革後のヨーロッパ

旧約聖書と新約聖書において女性預言者の存在が明らかにされており、新約聖書においては女性にある程度の指導的役割があつたことが見られる。使徒後の初代教会において、おもだつた教会の指導者はすべて男性であったが、女性の与えた神学的影響も無視することはできない。しかし、女性が按手された教職として表舞台に立つことは長らくなかった。

この流れに一つの変化をもたらしたのが、宗教改革である。信仰者万人司祭論は理論上、女性教職の可能性を拓くものであり、実際にカルヴァン自身も女性の教会内の地位についての変化を受け容れ始めていたと見られる⁽⁴⁾。女性のセクシュアリティが本質的に悪ではないと見なされ、聖職者の結婚が始まると、牧師婦人らはある種の指導的役割を教会内で果たしたと見られる。信仰者万人司祭を掲げた結果、執事・長老・教師などといった役職に女性が就く道も少しずつではあるがひらけはじめた。カルヴァンのジュネーヴにおいて、女性執事が存在したかどうかという歴史的証拠は存在しないが、マリアとマルタの例にならい、特に未亡人女性らの間で教導的役割を担つた女性執事が存在したという例がみられる。

バプテスト教会においては、女性の登用にさらに積極的な姿勢が見られた。一七世紀のイギリスから女性のバプテスト説教者が精力的に活動した。例えば一六四〇年代にイギリスのブリストルに設立されたプロードミード・バプテ

スト教会はドロシー・ハザードのリーダーシップによって設立された。ウェスレアン系では、ウェスレー自身女性説教者の登用を認め、ウェスレー没後、メソジスト教会に大きな影響をもたらしたアダム・クラークも、女性の働きに関して積極的立場をとった。

2 女性教職を送り出したアメリカの教会

ヨーロッパでは、少しずつはあるが女性の登用が広まりつつあるなか、女性に対し正式に按手を施したのは米国であった。一七九五年からバイバルの波が米国で始まる（*The Second Great Awakening*）、リバイバリズムの流れにあるプロテスタント系の教会やセクト系の教会の多くの女性たちが教会で説教を始めた。米国初の女性たちによる宣教会、ボストン・フィメール・ソサエティは、メリーウェブをリーダーとし、会衆派とバプテストの女性たちによつて一八〇〇年に結成され、一八一五年にはフリーウィル・バプテスト教会が女性に説教を行つライセンスを与えた。

ついには一八五三年九月一五日、米国ニューヨーク州サウス・バトラーにある会衆派の教会にて⁽⁵⁾、アントワネット・ブラウン⁽⁶⁾が教会歴史上初めての女性教職として按手された。彼女は一八二五年にニューヨーク州のロヂエスターに生まれ、チャールズ・フィニーーから大きな感化を受け、オウベリン大学で学び、一八五一年にニューヨーク州、サウスバトラーの第一会衆派教会の牧師となつた。一八五三年にニューヨーク市で開かれた世界禁酒運動大会で三時間にわたる熱弁をふるい、教会に戻つた後按手を受けた。按手礼説教を行つたのはウェスレアン・メソジスト教会の年会議長、ルーサー・リーである⁽⁷⁾。

ウェスレアン・メソジスト教会（現在のウェスレアン教会）は、当時奴隸制度を黙認していたメソジスト監督教会

に抵抗したオレンジ・スコットらの一派が、メソジスト教会から分離して形成した教会である⁽⁸⁾。当時のウェスレアン・メソジスト教会の年会議長であったリーは、女性差別問題にも注目しており、女性に按手することに肯定的な立場をとつていた。この教会は一八四三年に女性の権利大会⁽⁹⁾を主催し女性教職に対しても肯定的な立場を既に打ち出していたが、リー議長は、キリスト教会史上初めて女性が按手されるに当たつて会衆派の教会に赴き按手礼説教を行つた⁽¹⁰⁾。この按手は会衆派の教会であつたため、その会衆による独自の決断という面があつたが、一八六〇年代に入るとウェスレアン・メソジスト教会は教区単位で女性に按手を施しはじめ、一八九一年の総会にて女性を教職としてきていることを確認した。

メソジスト系では、救世軍が女性教職に関して最も積極的であつた。一八七〇年の設立時に救世軍は女性教職をすでに認めていたが、この教会の設立者ウイリアム・ブースの妻、キャサリン・ブースは結婚前から女性の権利に高い関心を持ち⁽¹¹⁾、女性の教会内の活動を押し進めるための著作活動を続けた。夫のウイリアムが病気で講壇に立てなくなると、彼の代わりに精力的に説教し、会衆も喜んで耳を傾けた。他にも、ホーリネス・リバイバリズム・ムーヴメントによつて十九世紀末から設立されていったチャーチ・オブ・ゴッド・アンダーソン、ナザレン教会、そしてビルグリム・ホーリネス教会⁽¹²⁾などはいずれも女性教職を公式に認めた。そうしたことから、これらのホーリネス系の教会では十九世紀末頃教職者全体の一〇三割を女性が占めるようになつた。またピラー・オブ・ファイア（現在のペントコスタル・ユニオン）といつこのホーリネス系の小さな教団は、教会歴史上初の女性監督を送り出した⁽¹³⁾。女性に対する教育の機会や参政権などが著しく制限されていた当時を考えると、女性の登用についていかに積極的な姿勢をとつていたかが伺い知れる。

バプテスト系も早くから女性の説教者に對して肯定的であり、例えばテキサス州、ダラスにある第一バプテスト教

セルシンダ・ウェリアムズの指導するグループによって一八六八年に始まっており、他にも多くの場所において女性伝道師が活躍した。コードン大学とコードン・コンウェル神学校の設立に貢献したA・J・コードン⁽¹⁴⁾は、女性が教会の公の場所で語ることに対する否定的な意見が出されたのをうけて、女性の公の場所での説教を擁護する論文を発表した⁽¹⁵⁾。十九世紀後期になると、バプテスト教会のコンヴァンションまたカンファレンスなどで女性教職を認め始めた。一八八九年チャーチ・オブ・ザ・コナティッシュ・ブレズレン・イン・クライストは女性を教職とするのを認め、一八九五年にはナショナル・バプテスト・コンヴェンション、そして一九〇七年には北部バプテスト・コンヴェンションは女性教職を正当とみなし、一九一八年にはバプテスト・ジェネラル・カンファレンスも女性教職を認めた⁽¹⁶⁾。

改革派系では、長老派系は女性教職について比較的慎重な態度をとった。十九世紀において女性による教会が結成され海外において女性宣教師は活躍したが、米国内において女性が握手を受けて牧師のように活動するのとは、長老派系の教会では期待されていなかつた。しかし、フニーーなどに代表されるリバイバルズムと比較的近い立場にあつた改革派系の教会は女性教職に肯定的な姿勢をとつた。例えば、北欧から北米への移民らを中心に行九世紀末に構成されたエヴァンジエリカル・フリー教会（Trinity Evangelical Divinity Schoolで有名）は、巡回伝道者のみなみに住む伝道者にも女性を登用していた⁽¹⁷⁾。またこの教会のフレッドコック・フランソン⁽¹⁸⁾は、「預言する娘たち（The Prophesying Daughters）」というパンフレットを著して女性による説教を擁護した。一八八八年にはディサイブルズ・オブ・クリイスト、そしてやや時期を経て一九二一年にカンバーランド長老教会も女性教職を認めた。ドワイト・ムーティはムーティ聖書学校を設立するにあたつて女性の入学者を認め⁽¹⁹⁾、そこで学んだ女性たちはムーティやシリ・サンタリの働きに積極的に参画した⁽²⁰⁾。その後、一九四八年にエヴァンジエリカル・アンド・リフオーム教

会も女性教職を認めるに至つた。

上述の教会はある程度の数の代表者らが集まり協議し決定したものであるが、教会の政治機構上、各教会の自主判断に任されているタイプの教会、また特に女性教職を禁じていなかつた教会で、この前後に女性に握手を施し始めた教会は、アドヴァント・クリスチヤン教会（一八六〇）、ニガーサリスト・チャーチ・オブ・アメリカ（一八六三）、クリスチヤン教会（一八六七）、アメリカン・ユニテリアン・アソシエイション（一八七一）、フレンズ・コナイトウド・ミーティング（一九〇一）などがある。

以上の通り十九世紀に於いて福音派の各派とユニテリアンズム系の各教会は女性教職を認め始めた。今日のハリゼム神学に対し比較的高い親和性を持つプロテスタントの主流派教会が女性教職に踏み切り始めた二十世紀半ばよりも約一世紀前から、福音派はすでに女性教職を送り出していた。

B 女性教職誕生の理由

旧約聖書の時代から信仰共同体の中で女性がある種の指導的役割を担つてきつたが、握手を受けた聖職者として正面に立つことは長らくなかった。それが何故この時期になつて米国で女性教職が出現してきたかを考えると、少なくとも以下の二つの理由が考えられる。一つはこの時期の米国において論争的目的であつた奴隸制度問題とキリスト論的平等主義、そしてもう一つは当時のリバリストに顯著であったディスペンセーショナリズムを土台とする聖靈論的聖職者觀である。

1 人種・性別差別問題とキリスト論的平等主義

一九六〇年代の米国における公民権運動が現在のフェミニズムの興隆に寄与したように、一八三〇年代以降における奴隸制廃止論が女性教職の道を拓くにあたって大きな影響を与えたと考えられる。キリストについて一つ（ガラテヤ三・二八）というキリスト論的平等性などを根拠に奴隸制反対を主張したクリスチヤンたちは、その確信を単に奴隸制問題のみならず、社会全般の問題一つ一つに適用はじめ、女性差別の問題にも取り組み始めた。

社会問題に積極的に取り組む姿は、現在の福音派においてやや異質なものと見えるかもしれないが、十九世紀の福音派は積極的に取り組んだ。例えば二十世紀の福音派を代表する人物、ビリー・グラハムは聖職者の使命を福音宣証と位置づけ、社会問題や政治問題に関わることを一次的なものとしたが⁽²¹⁾、そのグラハムと関係の深いホイートン大学の設立過程を見ると、非常に興味深いことが浮かび上がってくる。ホイートン大学は福音派の中で最も古く、また多くの福音派の指導者を輩出してきた大学であるが、もともとは反奴隸制の立場を当時最も強く持っていたウェスレアン・メソジスト教会によりイリノイ・インスティテュートとして一八四八年に建てられた。その後、経済的にこの学校を維持していくことが困難になり、一八六〇年に会衆派が運営に携わるようになつたものの、当時のウェスレアン・メソジスト教会が堅持していた奴隸制反対に代表される社会悪への高い関心は貫かれた。会衆派による運営体制が整えられるなかで招かれた初代の学長ジョナサン・ブランチャードは、福音派の中で著名な反奴隸制の指導者であり⁽²²⁾、ホイートン大学に招かれた際、完全な状態の社会とキリストの御国の実現に熱心に取り組み、新約聖書の語る平等にのつとり奴隸制の完全な撤廃を目指すと宣言した⁽²³⁾。

これはブランチャードに限らず、当時福音的リバイバルズムの指導者の一人でオウベリン大学において大きな影響を与えたチャールズ・フィニーにも見られた⁽²⁴⁾。フィニーは罪の本質を自己中心と理解し、キリストによる個人的な

回心経験の後は、神への愛、隣人愛というかたちに現れる自己中心から遠くあるクリスチヤン生涯を訴えた。その結果、極端な予定論に安じて愛の実を結ばないクリスチヤンらをフィニーは批判し、クリスチヤンが具体的な社会悪に対して熱心に取り組むように励ました。社会改革はリバイバルに続くものであり、愛の業の怠りはリバイバルを押しとどめるものと理解したフィニーは、奴隸制度を黙認するクリスチヤンらを特に激しく批判した⁽²⁵⁾。

いつもした著名的な指導者に限らず、当時の福音派は個人的な回心の経験とそれに続く愛の業を強調し、特に奴隸制反対問題に積極的に取り組んだ⁽²⁶⁾。この奴隸制反対の強調が、福音派を女性差別問題の存在にも目を向けさせた。そうした動きの最初の例の一つとして、アンジェリーナとサラ・グリムケ姉妹⁽²⁷⁾が挙げられる。この姉妹は女性が公の場所で語る権利について主張し、性別の平等に関する手紙（Letters on the Equality of the Sexes）を一八三七年に出版した。この中でサラ・グリムケは奴隸の立場と女性の立場を比較しつつ、女性差別の実態を鋭く批判した。このように人種差別問題に敏感になつていつた福音派は、キリストにあって一つひとつキリスト論的平等主義を男女差別問題に對しても向け始めた⁽²⁸⁾。

いつもした動きが福音派のなかで拡がるなか、人類の歴史上初の男女共学の大学が福音派から誕生した。これがオハイオ州シンシナティ市にあつたレイン神学校から分離した生徒らによつて一八三五年に設立されたオウベリン大学である。レイン神学校に在籍していたセオドア・ウェルドを中心とする学生たちは、奴隸制反対組織を結成し、行いの無い信仰は死んだものとの確信に立ち奴隸制度とそれを支える人種差別主義に公然と抵抗した⁽²⁹⁾。その結果、奴隸制度擁護の立場にあつた保守層によって占められていた学校と理事会側からこうした学生らに圧力がかかり、信仰と行いの自由を求めて学生たちはレイン神学校からの分離独立に踏み切つた⁽³⁰⁾。こうしてオウベリン大学を設立するにあつて、彼らは奴隸制のない平等社会実現の主張を男女の機会均等問題にも敷衍させ、歴史上初の男女共学の大学を

設立した⁽³¹⁾。教会史上初の女性教職であるアントワネット・ブラウンは、オウベリン大学にて神学教育を受け、他にも多くのオウベリン卒業生が女性権利活動家として活躍していった。

今日の米国におけるフェミニズムの興隆の源流を探っていくと、そこに十九世紀福音派があつたことは意外と知られていない。例えば、夫婦別姓を主張したルーサー・ストーン、また第一回女性権利大会のブレジデンントであったベツィ・カウルスは、オウベリンの卒業生である。上述のグリムケ姉妹は、聖書の翻訳の作業において男性の感性の及ぼす影響と聖書原語のニコアンスについて論じ、ホーリネス系の伝道者で女性教職擁護の *Women in the Pulpit* を著したフランシス・ワイラーードは婦人参政権の活動家としても有名であった。A・B・シンプソンも *Echoes of the New Creation* において、イエス・キリストの男性面を過度に強調する」といふて女性を従属的立場におくことに対する反対した⁽³²⁾。

十九世紀当時の福音派の持つていた社会的関心の高さ、そして彼らの持つていた信仰と善行のバランスについて議論はあるものの、彼らが善行について高い関心を持つていたことは明かである⁽³³⁾。現代の米国において福音派は保守派であり、伝統的社会的通念を守るうとする勢力であると理解されることもあるが、十九世紀においては逆で、福音派こそが、奴隸問題や人種差別問題、また女性差別問題、孤児や未亡人らまた経済的困窮者らの問題について非常にラディカルなアジェンダを持つていた⁽³⁴⁾。

確認するが、十九世紀福音派において社会改革を個人の救いよりも優先させる姿勢は無かつた。例えばオウベリン大学設立の過程において奴隸制問題は主要な論点の一つであつたが、この大学においての最も大切な課題は罪からの回心と聖化であるとフィニーは重ね重ね強調した⁽³⁵⁾。オウベリン大学内では宣教活動なども盛んで、設立後僅か一年で学内に六つの宣教会が組織され、特にアメリカ・インディアンへの伝道に強調がおかれた。そうして個人の救いを

強調する一方で、キリストにあつて一つというキリスト論的平等觀から人種差別・女性差別問題にも精巧的に取り組むというバランスを形成した⁽³⁶⁾。その結果十九世紀の米国の福音派は、女性に対する教職の道が閉ざされていることにキリスト論的平等觀から疑問を抱くようになった。

2 ディスペンセーションナリズムと聖靈論的聖職者観

ウェスレян教会の年会議長、ルーサー・リーのアントワネット・ブラウンに対する按手礼説教を読むと⁽³⁷⁾、十九世紀の米国福音派が女性按手に踏み切った神学的確信がにじみでている。使徒行伝にみる初代教会における先例、ガラテヤ三・一八によるキリストによって実現された男女の平等性、そしてヨエル書一・一八と、それに呼応する使徒二・一七からの聖靈の傾注による女性教職の正当性が論じられている。聖靈によって息子も娘も預言すると聖書にあることから、男性のみが教職に就くことはベンテコステ以降の教会に相応しくないといふ理解である。

教会の離形を論じるに当たり、天地創造における原初の栄光、アブラハムへの召し、あるいはイエス・キリストと弟子たちなどといった色々な点をキリスト教会は論じてきたが、十九世紀のリバイバリズムは、ベンテコステを教会形成の神学と実践の基準とすること多かつた。神からの召しと聖靈の満たしという両者があつて、はじめて教会の聖職者として立つことが出来るという考え方である。このベンテコステの出来事において、男性も女性も聖靈に満たされて預言するという聖句から、リバイバリズムは聖靈論的に女性教職を妥当とし始めた。かつて宗教改革後のプロテstantが万人司祭をもととしたキリスト論的女性の登用を考えたのに對し、十九世紀リバイバリズムは聖靈論的展開によつて女性教職を肯定した。神が女性に対しても聖職者としての召しを許す、聖靈が当該女性を満たしているの

に、それをどうして人がどうめることができるよ、といつも主張である(38)。

救世軍のキヤサソン・ペースの著した *Female Ministry* が、パンフレットに「ペントコスト」とは女性にも男性と同じ様の役割が聖靈によつて与えられた出来事であるとキヤサソン・ペースは論じ、人の偏見と寵愛によつて女性の機会が制限されることは難しかった。ホーリネス系において最大な影響を及べたフライラー・ペーマーは⁽³⁹⁾、ホーリネスのリバイバルの盛んだった一八五〇年代において四一一ページからなる *The Promise of the Father*（一八五九）を著し、その中で女性教職論を擁護した。彼女が編集を担当しホーリネス系を中心にして講演した「Guide to Holiness」誌では、ペンテコステの出来事による社会悪の根を打ち切る術であり、ペントコステが輝くほど女性たちが神の栄光のために公の場所で語り教えることのいた論調が続いた。他にも、フコーメンジスト教会の設立におけるコーチー、B・T・ロバーチュームより *Ordaining Women*（一八九一）⁽⁴⁰⁾、ナザレン教会のトマニー・ハンターによる *Women Preachers*（一九〇五年）⁽⁴¹⁾、W・B・モンタベイによる *Woman Preacher*（一八九一）などは、上記したペントコ斯特的聖職者觀⁽⁴²⁾として記された。上記した傾向はホーリネス系に限らず、リバイバルズム系全般に限られた論調であり、例えばバクトレスと使徒行伝一章から男性も女性も預言する聖靈の時代の到来を論拠として、女性の公的役割の妥当性を論じた⁽⁴³⁾。

こうしたペントコステ的教職觀を支えた聖書解釈の背後に、当時の福音派において顯著であったディスペンセーショナリズムの影響があつたと考えられる。聖靈の時代の到来というディスペンセーション的な歴史觀に根ざした聖書解釈は、旧約聖書時代にあつた奴隸制度を根拠に奴隸制度を肯定する保守派の聖書解釈を拒絶した。ペントコステ的聖靈の傾注によつてうち立てられる新しい価値觀と新しい平等性は、それ以前の価値觀よりも優先されねばならないという考え方である⁽⁴³⁾。これらをもとに、福音派は旧約聖書における奴隸活用の事實をもつて奴隸制度を擁護する保

守派を否定した。

女性教職反対論によく用いられた「コント一四・三四・三五」については、それが女性教職に明確に反対する聖書中の唯一の箇所であり、聖書全体にみられる男女の平等性、特にキリストにあっての平等性と聖靈が男性にも女性にも注がれて預言することから考え、これは特定の教会の特定の事情についてパウロが書いてあるものであると当時の福音派は理解した。また「テモテ一・一一」を女性教職問題と結びつける解釈にも疑問を呈し、女性教職を擁する」とこそベンテ「ステ以降の教会のあるべき姿であると論じた。

キリスト教会は、イエス・キリストの時代から約千八百年間女性教職を持たずについたが、十九世紀になつてついに女性教職を輩出するに至つた。その歴史的背景、神学的文脈をみると、女性への着手開始に至つた一つの流れを見る。奴隸制度問題に対するキリスト論的反論をきづかけとして女性の地位について多くの関心が集まつたところに、聖靈論的聖職者觀、神から召され聖靈が注がれた者は誰であつても教職となりうるという草の根のリバーバリズムの教職觀があつた。こうしてキリストにあつて一つというガラテヤ三・二八をもとにしたキリスト論的平等主義と、息子も娘も預言するという使徒の働き一一七による聖靈論的教職論から、史上初の女性教職が誕生した(44)。

按手開始後の展開

A 拡がる女性教職の波

先に見たように、十九世紀の福音派は女性の按手に積極的であった。当時の主流派教団が女性に按手を施さなかつた時代、福音派は女性の機会均等と女性教職を認め始めた。二十世紀に入つてもこの動きは続き、女性教職について比較的否定的であったファンダメンタリズム神学が興隆していた一九二〇年代においてさえ、いわゆるファンダメンタリズムと称される教会において当時としてはかなりの数の女性が教職として活動していた⁽⁴⁵⁾。こうした二重構造は、いわゆるエリーート神学者らによる神学的声明ではなく、それぞれの信仰的確信に基づいて行動するというリバイバリズム系特有のグラス・ルーツ的体質が原因であろう⁽⁴⁶⁾。

二十世紀に入り、リバイバリズム系の教会が女性に按手を施し始めて約一世紀ほど経つて主流派教団も第一次大戦後から次第に女性教職を送り出すようになった。ユナイテッド・ブレスビティアン教会は、一九一五年に女性が執事に就くことを認めたものの、一九二三年に宣教会が再編成されると、それまであった女性によつて運営される女性たちの宣教会の独立性が失われた。これに際し、合同長老教会のジェネラル・カウンシルはキャサリン・ベネットヒュガレット・ホッジの一人に女性の教会内における位置づけについてのリサーチを託した。一人は一九二三年にホッジ／ベネット・リポートを発表し、女性を長老（Elder）または牧師（Minister）として按手する、女性を長老（Elder）として按手する、女性を地方伝道師（Local Evangelist）としての一年間の免許を与える、とう三つの解決策を提示した。合同長老教会のジェネラル・アッセンブリーは、これらの案を長老たちに送つたところ、女性を

長老として按手する案が受け容れられ、一九三〇年に女性を長老として按手するようになつた。これによつて、各個教会において女性はリーダーの一人として参画することができるようになつたものの、聖職者として働くことは認められなかつた⁽⁴⁷⁾。その後一九五三年にロチエスターの長老より女性教職を認めるための動議が出され⁽⁴⁸⁾、一九五六年に女性を教職とすることが正式に認められた。

米国メソジストも同年に女性教職を認め、一九六八年における、エヴァンジエリカル・ユナイテッド・ブレスレンとの合併によってユナイテッド・メソジスト教会が誕生した際も女性教職は確認された。年代が前後するが、米国南部長老教会は一九六四年、アメリカン・ルーサレン教会とエヴァンジエリカル・ルーサレン・チャーチ・イン・アメリカは一九七〇年、そして米国聖公会（エピスコパル教会）も一九七六年に女性教職を認めるようになつた。また、一九七〇年代にはいつて、保守的な教会のなかでそれまで女性教職をみとめていなかつた教会のいくつかが方向転換をはかつた。メノナイト教会は一九七三年に、北米フリー・メソジスト教会は一九七四年に、エヴァンジエリカル・カヴァナント教会、そしてリリフォームド・チャーチ・イン・アメリカは一九七九年に女性教職を正式に認めるに至つた。

B 消極的姿勢の波

こうしてプロテスタントの間では女性教職を認める動きが盛んになりはじめた一方、これに疑問を投げかける動きもあつた。ローマ・カトリック教会と東方正教会は今日も女性教職を認めていないが、プロテスタントの福音派のなかにも女性教職に対し消極的な姿勢を打ち出す流れがでてきた。

福音派内のこうした消極的姿勢の代表的な声として、サザン・バプテスト・コンヴェンションにおける声明がある。

サザン・バプテストにおいては、もしも当該教会がよしと認めるならば、当該人物の性別、また教育の程度によらず教職となることができた。しかし、女性教職に關して議論は続き、一九八四年におけるコンヴェンションにて、「按手による教会内での牧会と指導的役割以外の全ての教会生活と働きの面での女性の働きを推奨する」という一文を含んだ決定事項を出した⁽⁴⁹⁾。これは一つの例であるが、福音派の教会において、女性教職に消極的な姿勢が見られるようになり、絶対数においても女性教職者数の頭打ち、あるいは減少がみられるようになってしまった。

この変化について、少なくとも三つの原因があると指摘されてきている⁽⁵⁰⁾。まず第一に、福音派の各教会が按手にあたって必要とされる学歴をセミナリーレベル（大学院レベル）に上げ始めてきていふことが考えられる。かつて草の根を主体とした福音派は、神よりの召しと聖靈の満たし、さらにある程度の学的訓練があれば誰でも牧師として把手を施し、教会や宣教地へ送り出した。その後福音派に中流階層が増えるにつれ、牧師に対するさまざまな要求水準も高まり、セミナリーレベルの学的訓練を受けていることが期待されるようになった。セミナリーの体制、また一般社会の女性に対する教育機会均等がいくら改善されてきているとはいえ、女性が大学卒業後、もともとは独身男性が行く場所とされていたセミナリーに進み修士号を取得するにあたっての経済的、また環境的難しさは依然として残っている⁽⁵¹⁾。

第二に考えられることとして、女性が何らかの指導的立場をとることに対する抵抗というものがある。いかにフェミニズムが興隆していても、女性による大統領の登場していないアメリカにおいて、これは文化的に深い問題であろう。ユナイテッド・メソジスト教会や救世軍では女性による指導者も珍しくないが、福音派においては、女性が前に立つて男性らを指導することを憚る声が女性からさえも聞こえてくる⁽⁵²⁾。また、かつては有色人種、また女性の立場改善に邁進した福音派であつたが、参政権、また教育と雇用の機会均等などにおいてある程度の成果が認められ始めている

女性差別問題から他の社会問題により多くの関心を持つようになったことも考えられる。

第三の点として、ファンダメンタリズム神学の影響が考えられる。ファンダメンタリズムの持つ特色として比較的よく挙げられているものの一つに、近代主義の影響によってキリスト教が近代の文化に飲み込まれていくことへの抵抗姿勢が挙げられる⁽⁵³⁾。例えば一八九〇年から一九一〇年にかけて反リベラル色の強かつた*Princeton Review*では、キリスト教かヒューマニズムかのどちらかの選択を迫る論調が多く、J・G・マイケンなどは、自由主義神学を近代主義に影響されたキリスト教的ではあるが全く別の宗教とする姿勢さえ辞さない態度をとった。

ファンダメンタリズムの持つこうした近代の変化を好みない姿勢は、福音派の持つていた女性教職觀にも影響を与えた。一九二〇年代の頃には、福音派たる以上、社会的関心を熱心に保持することは好みしないというようなイメージがファンダメンタリズム内に大きくなり、また男女同権、そして女性教職を認める動きはキリスト教と異なるヒューマニズムに根ざした自由主義神学による社会的アジェンダであると理解する向きが現れるようになつた⁽⁵⁴⁾。二十世紀になり、自由主義神学側からのフェミニズムが興隆するにつれ、この傾向はますます深まった。

ファンダメンタリズム系の聖書解釈のアプローチも、十九世紀福音派のものと若干異なる。前述の通り、十九世紀の福音派は、ディスペンセーションリズム的歴史觀に支えられた聖靈の時代における新しき照明をもとに、字義的な解釈よりも聖靈によつて示される今日的意義の追求の方により重点を置いた。一方、ファンダメンタリズムにおいては聖書の第一義的メッセージが時代によつて変えられていくことを警戒する方向が強くあつたことから、コ林ント一四・三四～三五と、テモテ二・一一～一二の解釈にあたつて、ファンダメンタリズム系はこれらの聖句を字義的にそしてどの時代、どの地域の教会にも全てあてはまるメッセージであると解釈するケースが増えた。これは、十九世紀の福音派がこの箇所を特定の時代の特定の教会に対するメッセージと解釈したことと対照的である。さらに、ファ

ンダメンタリズム系、特に保守系のプリンストン神学者らは、使徒の働きに記されたペントコステ的聖靈経験が教職となるにあたっての最重要な基準だとするリバイバルズムの主張を受け容れなかつた。聖書という文字の重みを重視する神学傾向の流れにあつて、ペントコステ的聖靈経験による導きという個人の経験の強調は相容れないものである。ファンダメンタリズムに続くネオ・エヴァンジエリカリズムの神学者らもディスペンセーショナリズムを批判する傾向にあつたことから、ディスペンセーショナリズムに根ざした聖靈論的教職論による女性教職擁護論を受け容れられない傾向にあつた。このように、実際問題や社会問題に対する態度、そして教職觀を支える神学的方向性が異なる以上、ファンダメンタリズム系とその後のネオ・エヴァンジエリカリズムなどの女性教職觀が十九世紀のリバイバルズムの教職觀と本質的に対立するのは必然的な結果であろう。

二十世紀に入り、キリスト教会全般に女性教職を認める動きが拡がる中、福音派は女性教職に関する姿勢に幅が出てきた。十九世紀において福音派はキリスト論的平等觀と聖靈論的教職觀から女性教職を推進したが、福音派と一般社会の構造変化や近代主義対根本主義の衝突のインパクトなどから、二十世紀になって女性教職に消極的な面も現れるようになつた。こうしたことから、女性教職に肯定的であり続ける教会、肯定的になつた教会、逆に否定的となる教会、など複雑な様相を呈している⁽⁵⁵⁾。結果として今日、米国福音派にて女性教職に関するコンセンサスが無いといふ事態になつてきている。

まとめ

十九世紀の福音派は奴隸制反対などにみられるように、キリストにあって一つというキリスト論的平等觀と愛によつて働く信仰により社会改革を率先して進めていくことを重視し、その姿勢を男女の機会均等の問題にもあてはめた。またディスペンセーショナリズムを背景とする聖靈論的教職觀をもとに本人への召しとペントコステ的聖靈経験を教職の資質とする考えは、女性教職を送り出す神学的土台となり、リバイバルズムを中心に女性教職、そして女性監督さえも登場するようになつた。

二十世紀に入り、女性教職を認め始める福音派の教会が増え続け、プロテスタントのメインラインの教会にも女性教職の波が拡がつていつた。その一方、聖靈論的教職觀をさほど重視しないファンダメンタリズム系は、反モダニズム的精神ともいいまつて女性教職に対し消極的な姿勢を見せるようになり、福音派の女性教職に対する見解は多様化している。

福音派における女性教職の歴史的立場は何であろうか。その答えは恐らく福音派、あるいは福音主義によつて変わつてくるであろう。もしも福音派がファンダメンタリズム神學と定義するなら、福音派は女性教職に否定的だと言えよう⁽⁵⁶⁾。そもそも福音派とは十九世紀のリバイバルズムに始まり、二十世紀以降はファンダメンタリズムとネオ・エヴァンジエリカリズムの影響も受けてきた流れの教会とするなら、福音派の女性教職に対する姿勢は、肯定的・否定的の両方が混じつたものと言えよう。筆者は、米国福音派はリバイバルズムとファンダメンタリズムやネオ・エヴァンジエリカリズムから影響をうけてきていること、そして聖書の権威を告白するナショナル・アソシエイション・オブ・エヴァンジエリカルズに加盟する米国福音派の教会の七～八割が女性教職を認めていることを鑑み、

米国福音派は女性教職について肯定と否定の両方の意見が複雑に展開されてきたと理解する。

女性教職についてこうした理解の幅と複雑さを米国福音派は持っているが、これこそ米国福音派の福音派たる結果であると筆者は理解する。福音派は、十九世紀においては社会的弱者を福音の故に覚えて積極的に取り組み、二十世紀には真理が世俗化によって浸食されていく危険に対しやはり福音の故に熱心に対応した。その結果、女性教職という問題に關しても実際的な面や神学的な角度から積極的に論じ、女性教職が非常識であった時代に女性に按手を施して教職とし、また女性に按手する事が時代の流れであるかのように考えられ始めた頃に、やはりその「常識」に対し熟考を促した。女性教職の是非をめぐつて議論は続いてきたが、父・子・聖靈の神によって与えられている福音に対しして真剣であるが故に女性教職問題も真剣に扱うという姿勢は福音派内にあって一貫してきた。今後も、福音に対しして熱心であるが故に、福音を宣べ伝えていみこの世にあつて真摯な議論を積み重ねつつ、この女性教職問題に關しても適切な答えを求めていく福音派であることを願つてやまない。

注

- (1) 聖職者と謂すの用語にて云ふ。即ち牧師として按手された聖職者 Ordained Minister を便宜的に教職と訳す。同様に Eldership Deacon は執事、 Licensed Preacher は公認牧師と訳す。

(2)

(2) 福福音主義の歴史とその影響を指す用語として、少なくとも二つある流れがあると指摘されており、日本語や英語で「福音主義」(Evangelicalism)、日本語では「福音主義」と書かれるが、「イエス語」や「福音」などと連なったのがさもありす。¹⁰ 第一の流れは宗教改革正統派を指すもので、evangelisch(福音主義)は特に敬虔主義をルーツとする特に米国リバティバализムを中心とする流れで、Theologie der Erweckungsbewegung(福音主義 Pietismus)として第II世紀オランダ・ハガト・ハガト・カトリック教会の流れで Evangelikale(福音主義)として、Pietismus(福音主義)の二つの関係をもつて位置づけられる。トマス・ヘンリッヒ・ドナウト(Donald Dayton, *Theological Roots of Pentecostalism* (Matuchen, NJ: Scarecrow Press, 1987); *Discovering An Evangelical Heritage* (Peabody, MA: Hendrickson Publishers, 1976)) ハンベート(ジョン・マーティン・マーティン)George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth-century Evangelicalism 1870-1925* (Oxford University Press, 1980)などがある。

(3) 一般に「ネオ・ヒュト・ハガト・カトリック」と云ふ用語を使つたのは、ハーバード神学校のハロウ・ハーバード・チャーチ・カレッジで、されてこる。第一次世界大戦後に始まつた動きで、聖書の権威を主張するところの点でファンタメンタリズムを継承していくが、ファンタメンタリズムの排他的ともいわれる(テイカルな姿勢を批判し、学的・実際的面で比較的オープンな姿勢をもつた)。現在はネオが省略され、エヴァンジリスト(福音主義)と呼称される。ファンタメンタリズムとエヴァンジリストカリズムが混同されるケースが時折見受けられるが、神学面と実際面において両者はかなりの違いを見せる。例えば福音主義の定義に關して、「ルター・グラハムに賛同する者たちのイエス・キリスト」ここにものがである。大雑把に見える定義であるが、現存する生糸のファンタメンタリズム系は、グラハムの神学と方法論が世俗化してしまった批判で、グラハムも極端な排他主義を敬遠するとか、ファンタメンタリズムと福音主義の違いを示すものとして的を射ている定義の一つであると考へられる。

- (4) ハーネー・ダグラスはカトリックの女性としての神学的理解について重要な論考を提出している。Jane Dempsey Douglas, *Women, Freedom, and Calvin: The 1983 Annie Kinkaid Warfield Lectures* (Philadelphia: Westminster Press, 1985).

奴隸を直接に扱わなかった結果隔離されたりともあったが、あくまでも奴隸制度反対の姿勢を貫いた。 Dayton, *Discovering An Evangelical Heritage*, 45-62.

(26) 奴隸制と人種差別問題、また女性問題などの中には、経済的に困窮している人たちや黒民の如きの逼迫や同時の福音派は積極的に行なった。あまり知られていないことであるが、いわゆる基督教系の社会派と呼ばれる流れの潮流を辿りながら、十九世紀のリバイバルズムの神学者、活動家の名前が挙がっていく。例えばローゼンハッカット博士は、初期の頃リバイバルズム系の教会と近い関係を持っていた。リバイバルズム系の書物を愛読し、同時スクワードであったロー・マークのタイムズ・スクワードにて都市伝道を行っていたA・B・シノフンの教会に出入りし、娘をオウベーン大に送り出された。後期の彼の神学はリバイバルズムと異なる面が多いが、初期の彼の神学と十九世紀リバイバルズムとの間に非常に興味深い関係がある。

(27) この姉妹は一般にクリスチヤンとして理解されるが、実際は少々複雑である。南部のヒューストン大学から長老派系のリバーバル運動に加わり、その後クリスチヤンとしてアンドリュー・ジョンソンは長老派系の福音派リーダーの一人で奴隸制度反対運動を開いたセオドア・カルソンと結婚した。属する教派のショットルによってその個人の持つ神学的特徴を簡単に説じるところでもない十九世紀米国の複雑なキリスト教教会事情を示す一つの例であらわす。

Dayton, *Discovering an Evangelical Heritage*, 89-91.

(28) (29) 学生たちは有色人種に対する学校を開設し、白人学校に招き入れ、経済的な援助も惜しまなかつた。やがてオウベーンの白人の学生たちは有色人種など食事をとむこと、また白人男性の学生たちのグループが黒人の女性などと一緒に過ごすことも行なつた。現在の感覚からすれば少し不自然なことではないが、当時の感覚からすれば、ヒューストン民族の総合にいたわる人種差別主義者にすれば、メイン神学校の学生への行動は常軌を逸脱した詐欺的な行動であつた。

(30) オウベーン大の初代学長は、メイン神学校の理事会の中央団体一身上の奴隸反対運動を支持したことアガ・マバー。ハイマーは、黒人学生の入学の是非を教授側に任せ、理事会が黒人学生受け容れに反対しなどを条件に教授への招き

立つた。これがオウベーン大等のヒューストンの如きでありながら、同时の福音派機関では非常に難しこそ問題である。また「奴隸制反対論者」が黒人に対する逼迫などの逼迫の如きの理學などといった保守的な立場を取つた。現在の感覚からすれば少し不自然なことではないが、当時の感覚からすれば、ヒューストン民族の総合にいたわる人種差別主義者にすれば、メイン神学校の学生への行動は常軌を逸脱した詐欺的な行動であつた。

Dayton, *Discovering An Evangelical Heritage*, 40-43.

(31) (32) A・B・シノフン博士"Christ's] humanity was unique and different from all other humanity. He is not a man, but He is the Man. He is not a male. He is just as much a woman as He is a man."と述べた。19世紀末から20世紀初頭のヒューストンのトマス・ハーディングは、ナンシー・ハーディング、ルシル・サイダー・デイтон、ドナルド・W・デイトン、"Women in the Holiness Movement: Feminism in the Evangelical Tradition," in *Women of Spirit: Female Leadership in the Jewish and Christian Traditions*, ed. Rosemary Ruether and Elenor McLaughlin (New York: Simon and Schuster, 1979); Nancy Hardesty, *Women Called to Witness: Evangelical Feminism in the Nineteenth Century* (Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1999).

(33) (34) 南北戦争を前にして、米国の中バイブルズムは千年前後臨説から十年期前再臨説へと変わつてこつた。19世紀福音派臨説は、現世に対する悲觀的な視点による社会的闇心の底辺の十分認められることの現象であるが、同时のリバイバルズムは伝道と社会活動に邁進するところもリバイバルズムの再臨説があくまで起きたことの十年期觀を持つてこつた。 Dayton, *Theological Roots of Pentecostalism*, 143-171.

リバイバルズムは、神聖な福音派の持つてこた反骨精神が、同时のリバイバルズムの革新性によつて細められた。しかし興味深い論文を發表し議論せ皆、アンドリュー・トマス・シノフン博士は、接点はつまつたが、リバーバルの育つた環境にあつたリバイバルズムの持つてこた反骨精神の如きは、トマス・シノフン博士は革新性とリバーバルの反骨精神とせ確かく認つむかのがある。 Donald W. Dayton, "James Dean, Popular Culture and Popular Religion: With Implications for the Study of American Evangelicalism" (paper presented at the annual meeting of the American Academy of Religion, Orlando, FL., November, 1998).

先に挙げたルター、カウニティー、ラムゼーの事例から、今日の福音派における社会的活動を個人の教訓回復と強調するよりも、社会一般の抱える数々の問題（刑務所伝道、都市伝道、家庭内暴力から酒類や薬物類、また賭博など）の中毒問題など）が現在も積極的にリーストローを開いているのも福音派である。やつこたのことを離れて、福音派=社会問題に懸念が擴てられてきたのが解る。

(37) (38) Lee, "Women's Right to Preach the Gospel," in *Five Sermons and a Tract by Luther Lee*, 77-100.

「Jの十六世紀女性教職を離れた教派」は、福音派の聖公会やルーテル派などの教派があるが、Jの流れはパンテリスト的女性教職論は異なる、神にちかく平穏性を説いた。ルーカー・コーセ女性教職の推進者であったが、コジカトーカリズムをその救拯論の故に批判つゝ、聖靈の満たしとの観点から女性教職の吸収性を説いた。コジカトーカリズムは十九世紀米国において女性教職をやめだした大きな流れであるが、その神学的根拠は異なる。

(39) ハーリー・ペニーの著書「神聖正統」 Charles Edward White, *The Beauty of Holiness: Phoebe Palmer as Theologian, Revivalist, Feminist, and Humanitarian* (Grand Rapids: Zondervan, 1986); Harold E. Raser, *Phoebe Palmer: Her Life and Thought* (Lewiston, NY: Edwin Mellen Press, 1987); Thomas C. Oden, *Phoebe Palmer: Selected Writings* (New York: Paulist Press, 1988)などがある。

(40) フコー・メソンバート教派の創設者・トーロビーラー、ハーリー・ゼリ「Ordaining Women」は女性教職を認めね難説を述べた。Jの盛期に於ける女性教職擁護の立場からの副書籍版について、Jの著作は比較的的的に書いたもので、ついである。現在は北米フリー・メソジスト教派の公式ウェブサイト (www.freemethodistchurch.org/PDF%20Files/Resources/Oraining%20Women.PDF) にて閲覧可能である。

<http://www.freemethodistchurch.org/PDF%20Files/Resources/Oraining%20Women.PDF>

(41) 「Jの二つの派別」の聖職者觀とは、神からの知りし者としての聖靈の襲たつし同様の経験を持つJの聖職者觀を指す。一度ルターの神学が十架架の神学を中心と形成されたものが、十九世紀バイブルズムせぐホントリストの神学がその中心において、聖職者觀においてもやへホントリスト的経験が大きな意味を持つた。Jのペントリスト的経験の強調が現在のペントリストリズムの勃興につながった。Jのした十九世紀のバイブルズムは「十世紀のペントリストリズムの神学」ではあつて、トマスの *Theological Roots of Pentecostalism* が詳細な分析を行つてゐる。

(42) 「一ヶ所せし」 in every great spiritual awakening in the history of Protestantism the impulse for Christian women to pray and witness for Christ in the public assembly has been found irrepressible. と述べた。

(43) ベハドロースは、十九世紀後半から米国福音派に顯著に現ひれた「マイスペンヤー・ナコバーズ」根本的に矛盾あると語つてゐる。しかし、福音派による歴史觀の新しい段階を強調する「マイスペンヤー・ナコバーズ」が、女性教職論の神学的土台となつた。二十世紀初頭の福音派は、千年期前再臨説を基とした歴史觀を持つて、この結果、Jの世界が良い方向へと進歩（進化）してこゝへといたる方には否定的であった。これは確かにプロセス神学などの方向性と衝突するJとかば、プロセス神学に結びついたタイプの「H III」ズム神学と千年期前再臨説を強調する流れは互に相容れない。しかし、マイスペンヤー・ナコバーズの故に千年期前再臨説をひきだせないない神学的必然性は存在せず、また千年期前再臨説を強調する流れもこゝへと流れ、その流れ純血の「H III」ズムの強調が展開され、Jのかば、ベハドロースの指摘はプロセス神学系の「H III」ズムに対する再臨説派との關係に限つて理解するにひだり得ない點がわからぬ。参照 Margaret Lamberts Bendorff, *Fundamentalism and Gender: 1875 to the Present* (New Haven: Yale University Press, 1993).

(44) 当時の女性教職を推す神学的根拠は、代表的なものとして、天地創造時における土の穀の平穏性が「いやのや」であった。これまたコジカトーカリズム系も若干触れていた。しかし、コバイブルズム系の教宗たちの「マイスペンヤー・ナコバーズ」的歴史觀からの創造説もつゆくべクトリスト以降を重視してこだりとども、Jの神

- Chaves, Mark. *Ordaining Women: Culture and Conflict in Religious Organizations*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1997.

Dayton, Donald W. *Discovering An Evangelical Heritage*. Peabody, MA: Hendrickson Publishers, 1976.

 - . *Theological Roots of Pentecostalism*. Matuchen, NJ: Scarecrow Press, 1987.
 - , ed. *Five Sermons and a Tract by Luther Lee*. Chicago: Holtrad House, 1975.
 - , ed. *Holiness Tracts Defending the Ministry of Women*. New York: Garland Pub., 1985.

Dayton, Donald W. and Lucille Sider Dayton, "Women as Preachers: Evangelical Precedents," *Christianity Today* 19 (23 May 1975): 4-7.

, "Your Daughters Shall Prophesy: Feminism in the Holiness Movement" *Methodist History* 14 (1975): 67-92.

DeBerg, Betty A. *Ungodly Women: Gender and the First Wave of American Fundamentalism*. Minneapolis: Fortress Press, 1990.

Douglas, Jane Dempsey. *Women, Freedom, and Calvin: The 1983 Annie Kinkead Warfield Lectures*. Philadelphia: Westminster Press, 1985.

Frederick W. Schmidt, Jr. *A Still Small Voice: Women, Ordination, and the Church*. Edited by Amanda Porterfield and Mary Farrell Bednarowski, *Women and Gender in North American Religions*. Syracuse, NY: Syracuse University Press, 1996.

Hardesty, Nancy A. *Women Called to Witness: Evangelical Feminism in the Nineteenth Century*. 2nd ed. Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1999.

Hassey, Janette. *No Time For Silence: Evangelical Women in Public Ministry Around the Turn of the Century*. Minneapolis, MN: Christians For Biblical Equality, 1986.

Hatch, Nathan. *The Democratization of American Christianity*. New Haven: Yale University Press, 1989.

 - . "Taking the Measure of the Evangelical Resurgence, 1942-1992." In *Reckoning the Past: Historical Essays on American Evangelicalism from the Institute for the Study of American Evangelicalism*. Edited by D. G. Hart. Grand Rapids: Baker Book House, 1995. Originally delivered from "Can Evangelicalism Survive Its Success?" in *Christianity Today* (October 1992): 21-31.

卷之三

- こうした理解は、特に福音派以外の手によるリサーチにおいてしばしば見られる。例えばシャウスは、サザン・バプテストを例にとり聖書の権威を主張する教会は反女性教職であると論じている。十九世紀のリバイバルズムが女性教職に積極的であったことは認めつつも、「これらの流れが聖書信仰の流れの主流派ではない」とがその論拠である。確かにリバイバルズムは、ファンダメンタリズムとネオ・エヴァンジエリカリズムの神学者らの批判の対象となることが多かった。しかし、二十世紀初頭のいわゆるファンダメンタリズム的な教会は女性教職を認めており、また最近のネオ・エヴァンジエリカリズム正統派的教会、また聖書信仰の代表的団体、ナショナル・アソシエイション・オブ・エヴァンジエリカルズの加盟教会の多くが女性教職を認めていたことを知ると、聖書信仰即女性教職反対とする見方は現実に即していないことが解る。福音派の一部の声のみに注目し、福音派全体の複雑な歴史と構造を捉えない例の一例でもある。参考Mark Chaves, *Ordaining Women: Culture and Conflict in Religious Organizations* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1997).

."The Puzzle of American Methodism." *Church History* 63 (1994): 175-89.

Hays, Elinor Rice. *Those Extraordinary Blackwells*. New York: Harcourt, Brace and World, 1967.

Howe, E. Margaret. *Woman and Church Leadership*. Grand Rapids: Zondervan, 1982.

Hunter, Fannie McDowell. *Women Preachers*. Dallas: Berachan Printing, 1905.

Kerr, Laura. *Lady in the Pulpit*. New York: Woman's Press, 1951.

Kraditor, Aileen S. *Means and Ends in American Abolitionism*. New York: Pantheon Books, 1969.

Laird, Rebecca. *Ordained Women in the Church of the Nazarene: The First Generation*. Kansas City: Nazarene Publishing House, 1993.

Leonard, Juanita Evans. *Called to Minister: Empowered to Serve*. Anderson, IN: Warner Press, 1989.

Marsden, George M. *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth-century Evangelicalism 1870-1925*. New York: Oxford University Press, 1980.

Melton, J. Gordon, ed. *The Churches Speak On: Women's Ordination*. Detroit: Gale Research, 1991.

Murdoch, Norman H. "Female Ministry in the Thought and Work of Catherine Booth," *Church History* 53 (September 1984): 355.

Nesbitt, Paula D. *Feminization of the Clergy in America: Occupational and Organizational Perspectives*. New York: Oxford University Press, 1997.

Oden, Thomas C. *Phoebe Palmer: Selected Writings*. New York: Paulist Press, 1988.

Raser, Harold E. *Phoebe Palmer: Her Life and Thought*. Lewiston, NY: Edwin Mellen Press, 1987.

Roberts, Benjamin Titus. *Ordaining Women*. Rochester: Earnest Christian Publishing House, 1891. Reprinted from Light and Life Press in Indianapolis, 1992.

Ruehle, Rosemary and Eleanor McLaughlin, ed. *Women of Spirit: Female Leadership in the Jewish and Christian Traditions*. New York: Simon and Schuster, 1979.

Sandeen, Ernest R. *The Roots of Fundamentalism*. Chicago: The University of Chicago Press, 1970.

Stanley, Susie Cunningham. *Feminist Pillar of Fire: The Life of Alma White*. Cleveland, OH: Pilgrim Press, 1993.

Wessinger, Catherine, ed. *Religious Institutions and Women's Leadership: New Roles Inside the Mainstream*. Edited by Frederick M. Denny,

Studies in Comparative Religion. Columbia, SC: University of South Carolina Press, 1996.

White, Charles Edward. *The Beauty of Holiness: Phoebe Palmer as Theologian, Revivalist, Feminist, and Humanitarian*. Grand Rapids:

Zondervan, 1986.

(ハノンハニョウノタマシ · ニニ - 大朴・豊田監修社)